

風と雲の便り

野殿・童仙房から……

野殿・童仙房へ…… vol.4

早いもので
お知り合いになって1年余りが過ぎました。
「風」は目に見えず
「雲」は手に触れることが適いせんが
『風と雲の便り』は
確かな〈手ごたえ〉を感じ取っています。
ここまでたどり着けたのも
地域の方々の温かいまなざしと声援のおかげです。
同時に、まだ見ぬ遠くの読者の声なき声と
まなざしにも支えられているのを感じます。
「野殿・童仙房から」発信し
「野殿・童仙房へ」と発信される
ことばの数々が、読む人の声とまなざしに支えられ
味もにおいもある『風と雲の便り』に
育っていくことを願わずにはられません。



京都府 野殿・童仙房

京都大学大学院教育学研究科
「魅力ある大学院教育」イニシアティブ

雲の便り

子どもからおとなまで楽しめる「フリーマーケット in 童仙房」

きたる4月29日(日)、童仙房の地で「市」(フリーマーケット)を開きます。

地元の方は、野殿や童仙房で採れた新鮮な野菜・しいたけ・お茶など何でも、どなたでも自由に出品することができます。

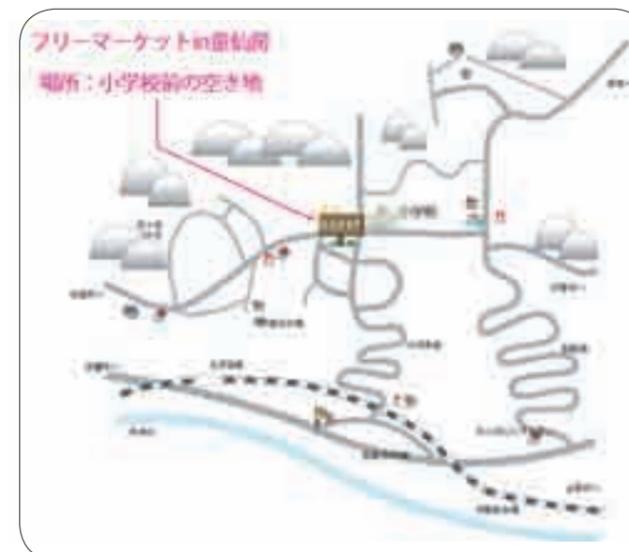
外からの人も大歓迎です。ウォーキングやハイキングのかたわら、寄り道して「ひやかして」下さい。新鮮な野菜を買うのもよし、家庭の日用品や都会のめずらしい品を売るのもよし、そして地元の特産品と交換するのもよいでしょう。自分たちにとっては unnecessaryなものでも「欲しい!」と思っている人はきっといるはずです。

同時に、このフリーマーケットは、子どもたち自身が盛り上げ、盛り上がるイベントでもあります。子どもの、子どもによる、子どものためのフリーマーケットです。出品、値つけ、売買の交渉など、ワイワイガヤガヤ言いながら、働くことと学ぶことが自然に身につくことを願っています。

日時: 4月29日(日) 午前10:00～

場所: 旧野殿童仙房小学校前広場(雨天の場合は、旧野殿童仙房小学校体育館内)

主催: 野殿童仙房生涯学習推進委員会



「地域通貨」を知ろう②

地域通貨ってなに? ——生涯学習と地域通貨を結ぶもの

私たちは、生涯にわたり学び続ける存在だとしたら、自分をどのように見てどう考えますか。

生涯学習は、生活の向上、職業上の能力の向上、自己の充実を目指し、各人が自発的な意志に基づいて行う学びであったり、必要に応じ、可能な限り自己に適した手段及び方法を自ら選びながら生涯を通じて行う学びでもあります。学校や社会の中で意図的・組織的な学習活動で、スポーツ活動、文化活動、趣味、レクリエーション活動、ボランティア活動などがそれに相当します。つまり、「いつでも」、「誰でも」、「どこでも」、「何でも」学べる行為と言えます。

また、私たちの日常の会話の中で「お金がないと何もできない」とよく耳にします。確かに、電気・水道・ガス代、交通費、食費、家賃、買い物代など全てにお金がないと成り立たないことも事実ですね。でも、ちょっと立ち止まって「本当にそうなのかな?」って疑問を持ち、自分の今の生活そのものを見直してみたらどうでしょうか。きっと、自分の生活を振り返るきっかけが、その瞬間から始まるでしょう。そのように自分の生活を見直す動機を与えてくれるものが地域通貨なのです。私たちの生活そのものを、お金だけではない生活のあり方を、根本から考えさせてくれるものが「地域通貨」と言えます。こう考えると、地域通貨は私たちの生活の中で、子どもや大人や老人、男性や女性に関係なく、いつでも、誰でも、どこでも、何にでも、お金の替わるチケットとして使用できるのです。使い方は自由自在です。お年寄りが自分の語れる昔話を孫や子どもたちに語り、地域通貨をチケットとしてもらい、自分がして欲しいこと、



たとえば庭そうじ、肩たたき、買い物、洗濯などをしてもらいチケットとして手渡すものなのです。その様に考えると、その使い方は無限に広がって行きます。

生涯学習と地域通貨は、私達にとり少し張りのあるちょっと生活を変えてみたいと願う人には大切なものとなります。同時に、この二つのあい異なるように見えるものが、実は同じ次元で同じ地平線を目指しているものなのかもしれません。

関上哲 Satoshi SEKIGAMI 東京農工大学大学院

今後のお知らせ、詳細などは <http://souraku.net/manabi/>

京都大学問い合わせ先: 「魅力ある大学院教育」イニシアティブ「フィールド委員会」
〒606-8501 京都市左京区吉田本町京都大学大学院教育学研究科
TEL:075-753-3030

野殿・童仙房問い合わせ先: 野殿童仙房生涯学習推進委員会
〒619-1401 京都府相楽郡南山村大字童仙房小字三郷田 199 番地 2
会長 中村富士雄/副会長 西村秀俊

2007年3月25日発行
発行: 京都大学大学院教育学研究科「フィールド委員会」
プロジェクト「フィールドを立ち上げる」
編集: 前平泰志
編集協力: 倉知典弘
版画: 馬場正幸
制作: (株)松籟社

2006 年度 京都大学 野殿・童仙房での活動の記録

京都大学がフィールド研究の一環として、野殿・童仙房地区をおとずれてから1年になります。そこで、このたび京都大学が野殿・童仙房で研究を行う意味と2006年度1年の活動をQ&A形式でまとめました。(なお、このまとめは、「魅力ある大学院教育」—イニシアティブ「理論・実践融合型による教育学の研究者養成」『最終報告書』に掲載された文章を一部修正して転載したものであることとお断りしておきます。)

Q.1 京都大学大学院教育学研究科が野殿・童仙房地区で生涯学習の研究と実践を始めた経緯を教えてください。

A.1 概要は、2006年度の「活動一覧」として図表にしておきましたから、そちらをご覧ください。まったくの偶然が重なったとしか言いようのない出会いから出発しましたが、研究フィールドを探していた大学と地域の将来について危機感を持っていた地域双方の想いが合致してここまで来られたのだと思います。

Q.2 具体的にはどのようなことでしょうか。

A.2 京都府相楽郡南山城村の旧野殿童仙房小学校が2006年3月末で閉校になりました。この旧小学校を拠点としながら新しい教育空間を作ることを目指して活動を始めました。川崎良孝教育学研究科長と中村富士雄野殿区長、西村秀俊童仙房区長が生涯教育に関する協定に調印したのは、2006年6月23日のことです。

Q.3 京大が野殿・童仙房地区と協定を結んだ意義はなんでしょうか。

A.3 まず何よりも、京大が行政単位ではない地域自身と協定を締結したことです。従来、大学の地域貢献や地域連携というものの内実、実際には大学と行政の連携がほとんどでした。大学が地域自身と直接このような協定を結んだことはめざらしいのではないのでしょうか。その意図は、行政主導型ではなく、住民が主体的にかかわって地域の問題を解決し、再生を目指していくそのプロセスに大学が研究や学生の教育を通してかかわっていききたいというものです。そのために「区」とは別に、「野殿童仙房生涯学習推進委員会」という組織を新たに立ち上げ、同地区と京都大学との連携をより明確にしようとしています。

Q.4 京大の目的はなんでしょうか。

A.4 フィールド研究といえば、これまでは研究者の知らない地域に出かけて行って、研究という名目でその地域の習俗や出来事を記述することで自足する傾向がありました。また、拠点としての施設の利用といえば、大学の課外活動の一環として施設を大学の都合で利用するだけの、いわば「植民地」活動に似たことを行なっている大学もあるようです。要するに、地域に

何の貢献もなされない「地域貢献」が少なくないのです。そのようなものでなく、京都大学のもつ豊かなリソースをもとにして、地域の抱える課題と向き合って地域活性の新しいモデルづくりに協力し、生活と学習を組み合わせた新しい学びの共同体づくりをめざすことです。

Q.5 地域の人たちや地域外の人たちには京大の活動をどのように知らせていますか。

A.5 『風と雲の便り』という広報誌を創刊しました。年4回刊行、今後も継続して発刊する予定です。主として、野殿・童仙房の人たちに向けて発信するものですが、同時に地域の再生や広い意味での教育問題に関心を持つ全国の方に読んでもらいたいと思っています。

Q.6 具体的にどのような活動や行事が行われたかを教えてください。

A.6 「昔子どもだったおとなと今の子どもと未来の子どものための農業体験」という農業体験プログラムをスタートさせました。これは、地元の有志の方の指導を受けながら、農作物の命が育っていく驚きと命を育てる労働の喜びをすべての子どもたちに知ってもらい、この経験を次世代の子どもたちにも伝えていければという願いをこめて立案されたものです。〈子ども〉というキーワードが入っていますが、これは子どもの視点で〈農〉を見直そうという意図からきています。昔子どもだったおとなでもよいのですから、実際には誰もが参加できることを想定したネーミングです。もちろん学生も可能な限り参加しました。

Q.7 この活動の面白さや課題などたくさんあったでしょうね。

A.7 11月の収穫祭では、収穫したキャベツ、ブロッコリ、大根、白菜などの野菜と、地元で猟師さんの獲ったイノシシの肉の料理をおいしくいただきました。この企画はもちろん1年限りで終わるものでなく、永続的に取り組まれる企画ですので、来年度以降も行ないます。何と言っても、自分で種をまいて収穫して、それを調理して、食べるという一連のプロセスにかかわれたのですから、最高です。農村や農業を知らない学生たちにとっても、異文化体験であり、いろいろ新しい発見があったことでしょう。

課題はもちろんたくさんありました。たとえば子どもの参加といっても、Iターン組の子どもたちが中心で、地元の子どもは普段見慣れているためか無関心だったことです。事前に十分な広報がなされていなかったということも重なったかもしれません。この点は、広報の問題も含めて、考えていかねばならない課題です。

Q.8 収穫した野菜を出店したそうですが。

A.8 南山城村主催の「生き生きまつり」への収穫した野菜の出店は、経済活動というより、私たちの活動をより広範な人たちに知っていただく活動として位置づけていました。とはいえ、村の方々には好評で、農薬と化学肥料を使っていない野菜を完売しました。同時に、野殿・童仙房の人たちとも協働することで、お互いの信頼ができてつあると感じています。

Q.9 8月に行われた夏季セミナー「結んで 拓いて」について説明してください。

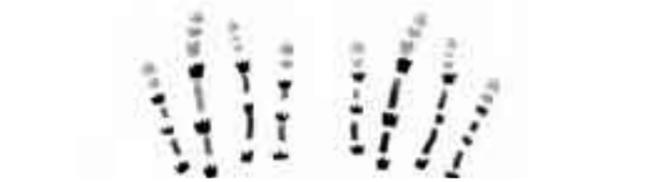
A.9 「セミナー」は2本立てで開催されました。8月9-10日の両日、韓国の梨花女子大学の教授をゲストに招き、午後の研究会として「地域通貨—人を結ぶ・地域を拓く」を、夜は「地域を結ぶ・地域を拓く」というテーマで、人と人、地域と地域を結び、地域を新たに拓いていくことを念頭におきながら、ともに語り合うための「公開セミナー」として企画されたものです。

Q.10 実際に大学院生の教育と研究はどのように行なわれたのでしょうか。

A.10 院生諸君の貢献は、協定調印式やセミナー、そして種々の会合の準備などのお手伝いや農業体験にとどまったわけではありません。実際に、金智鉉さんは「都市の中で生きる—私の異文化体験から」の報告を調印式の際に行ないましたし、猿山隆子さんは寄り合いの席上で現在研究中の「生活を見つめること・生活から学ぶこと—鶴見和子の生活記録運動—」を報告しました。倉知典弘君は夏季セミナーのなかで『「地域通貨」とはなんだろうか?—地域通貨の初歩的紹介—』を報告しました。また広報誌の編集も3号以降は院生が主体的に担ってくれています。

2006 年度 京都大学 野殿・童仙房地区における活動一覧

1月10日	地域住民が前平研究室を訪問(出発点)	8月20日	地域役員が生涯学習推進委員会の畑を準備(土入れ、耕耘、施肥)。
2月15日	地域住民が京大でプレゼンテーション(学生と初対面)	以降、8月26日、9月30日、10月14日、10月28日、11月11日に畑作業を行なった。	
3月2-3日	京大グループが童仙房へ(地域役員と初対面)	10月31日	広報誌『風と雲の便り』第2号発行
3月9日	京都大学大学院教育学研究科から、村長宛に跡地利用要望書提出	11月18-19日	収穫祭
4月20日	京大で学生へフィールドの説明会	11月23日	南山城村「生き生きまつり」に収穫野菜を出品
4月下旬	前平教授から地域住民宛にあいさつ文を配布	12月8日	地域の「寄り合い」(来年度以降の活動計画の説明)
4月29日	小学校跡地で「寄り合い」(地域住民と初顔合わせ)	1月26-27日	京都生涯学習研究会の野殿童仙房地区の訪問・研修会(野殿区長の講演・案内)
4月30日	京大とコープが初顔合わせ(京大は住民宅で宿泊、小学校で会合)	2月10日	広報誌『風と雲の便り』第3号発行
6月17日	協定書調印式の準備作業(京大学生が来訪)	2月17-18日	野殿童仙房生涯学習推進委員会との1年間の総括
6月23日	協定書調印式(京大グループ、小学校で初の宿泊)	2月23-24日	フィールド委員会による「フィールド委員会の活動を振り返る」
6月24日	地域の住民と会談、地域内の視察		
7月31日	広報誌『風と雲の便り』第1号発行		
8月9-10日	夏季セミナー「結んで 拓いて」		



前平泰志

